

庄内を訪れる回を重ね、世のため人のためと動いた先人の夢に触れるつど、確と領いている。

歴史が醸し出す

オーラの漂う場所

西水美恵子

|| 文

庄内のあちこちに、不思議な雰囲気がある。傑出した人物に感じるカリスマに似ていて、まるで歴史が醸し出す息吹のようだ。ギリシア語の「アウラー（息）」に由来するオーラという言葉が、よく似合う。

そのオーラを意識したのは一昨年の春、庄内空港に初めて降り立った瞬間だった。迎えの方が「庄内人の魂がこもる空港」と、教えてくれた。山海に包囲され「陸の孤島」とさえ呼ばれた地に住む人々にとって、空港は長年の夢。庄内人はその夢を現実にと自主的に動いた。ひと昔前ブータン王国初訪問の際にも、全く同じ体験をしていた。あの国の空港も、「ヒマラヤの秘境」に住む民が自ら叶えた夢だったと思ひ出して、確と領いた。

庄内を訪れる回を重ね、世のため人のためと動いた先人の夢に触れるつど、確と領いている。庄内藩校致道館では、清閑な佇まいが醸すオーラに圧倒され、第7代庄内藩主、酒井忠徳公に想いを馳せた。自主性を重んじよという現代でさえ希有な教

育方針に驚き、それを命じた名君の、とてつもなく大きな夢を垣間見た気がした。

松ヶ岡開墾場のオーラにも、並外れた重量感があった。なぜか駆け足訪問はいけないと強く思うところがあつて、今春ようやく機を得た。そのせいか、それとも早朝の月山山麓を渡る風のせいか、開墾場を東西にぬける並木道に一步踏み入れて、鳥肌が立った。木造瓦葺3階建の大蚕室5棟が、葉桜の奥からその凛とした立ち姿を現し、語りかけてきた。ゆるゆると大蚕室の間を抜けながら、開墾の歴史を顧みた。旧藩士が険しい原野の開墾に着手したのは、明治5年早春のこと。総勢3千人を超える大規模な開墾団隊組織とはいえ、60日を切る工期で323ヘクタールを竣工したと聞く。それから桑園を造成し、蚕室が完成したのは明治8年の春。同年夏には、養蚕と蚕種の製造出荷に成功した。原野から蚕種の輸出までわずか3年少々……。その驚異的な速度に改めて気づき、旧藩士と家族のご苦労や如何にと、

胸が詰まった。

松ヶ岡開墾場綱領その一、「徳義ヲ本トシ産業ヲ興シテ国家ニ報シ以テ天下ニ模範ヲラントス」。刀を鋏に持ち替えて未来を切り開いた先人を想いつつ、松ヶ岡本陣の小高い丘を登りきった。眼下に広がるこの地を慈しみ育ててきた人々のカリスマが結晶になって、朝日に輝いていると思つたら、涙だった。

訪問の最後を一人の若者が飾ってくれた。蚕室の一角に陣取る食事処「待カフェ」で、松岡物産社長、酒井忠順氏の夢に聞き入った。御馳走になった「絹麦きり」（絹タンパクを小麦に練り込んだオリジナル麺）にも、桑の実と絹の「松ヶ岡シルキードレッシング」にも、先人の偉業を受け止め未来へと繋ぐ、斬新希有なアイデアが詰まっていた。ふた品の美味に舌鼓を打ちながら、致道館の息吹を聞いた。忠徳公の大きな夢今ここにも捻ると、領いた。



国指定史跡松ヶ岡開墾場 蚕室。
(鶴岡市羽黒町松ヶ岡)

にしみず・みえこ 大阪府豊中市生まれ。東北公益文科大学大学院客員教授。ソフィアバンク・パートナー。75年、ジョンス・ホプキンス大学博士課程卒業。プリンス・トン大学経済学部助教授を経て、80年、世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁就任。03年退職以来、世界を舞台に様々なアドバイザー活動を続ける。米国首都ワシントンと英領バージン諸島在住。著書に『国をつくるという仕事』（英治出版）がある。